

纏足についての研究

A Study on Foot-Bind

黄 紅萍

Hongping HUANG

はじめに

纏足については、ただ単に女性の足の事と考えられるかもしれない。しかし、古代の人々は一千年ぐらいの間も気にして苦労してきた問題である。五代南唐以来、歴代の朝廷を経て、皇帝が変わっても、纏足の風習は変わらなかった。これは、奇形な意識から生まれる奇形な風習である。

女性は纏足する事によって、外出や労働が不便になるために、女性の家庭内幽閉を一層助長した。女性美、官能美の一条件として男性の猟奇的な嗜好、玩弄の対象であった。女性の一生は生まれるたびに、苦痛と不自由を強いられる一方、纏足は、まさに、女性が隷属的な地位にあった、中国封建社会の象徴的な産物と言えよう。

本研究においては、歴史と照らし合わせながら、纏足の起源説をはじめ、纏足方法、纏足靴の分類など、中国文化史上の奇跡と言える纏足を探求して見た。

1. 纏足の起源説 (図1参照)

纏足はいつ始まったが、数多くの研究者は一生懸命考証してきた事であろう。しかし、人々に心服するような結論は出ていない。史料も少ない。何故なら、纏足は国史級のレベルに達していない、一種の風俗史であるからである。

纏足の起源を究明するには、有力な考証が得られない限り、色々な起源説が考えられるが、ここで、収集したデータに基づき、9つの起源説を年代順に述べる。

1) 商説 (西暦前1600~1066年)³⁾

褚稼軒(チョカケン)の『堅瓠集』によると、殷(イン)の紂王(チョウオウ)が熱愛していた、后である妲己(ダツコ)は狐精のような女性で、帛(ハク)で足を包んでいた、宮廷の后は皆それをまねたという説。

この説に対して、後、多く人々は『堅瓠集』はただの「狐鬼」物語で、信じれる部分が少ないと否定された。

(商とは三代の一つで、夏の次、初めの国号は商、湯王が初代で、紂王の時、周に滅ぼされた。殷の都は、今の河南省安陽市にあたる。)

2) 春秋説 (西暦前770~476年)³⁾

『漢隸釈言』の中に「画老菜之母，曾子之夫妻，履頭皆鋭。」と書かれている。その意味する事は、「画老菜之母，曾子の妻が履いている靴の先は皆尖る」という事である。

3) 戦国説 (西暦前475~221年)³⁾

『史記』の中に「臨淄女子弾弦絃足」，「揄修袖，躡利屣」書かれている。「絃足」は足の指先だけで着地するという意味。女子は纏足しているから、足の指先だけが着地しているように見える。躡は踏む、歩く。利は尖る、屣は靴の意味。「利屣」を履く者は、纏足しているから指先が尖るといふ事になる。従って、纏足は戦国

時代から始まると言う縁起説が作られた。

2), 3) 両説に対して反論もあった。「履頭皆鋭」, 「躡利履」はただ尖る靴を履いているだけと記載され, それで纏足しているという断言ができない, 「尖頭靴」を履くのは, その時代の女子の一種の風俗に過ぎないと指摘された。

但し, 私は, 当時の人は纏足をするという発想がまだないとしても, 以後の纏足の大流行に心理的な受け皿のような者になったと推測する。

4) 秦説 (西暦221年)¹⁾

資料によると, 秦の始皇帝は美女を選ぶ時, 女子の小足も選美標準の一つになっていった, 選ばれた女性も始皇帝に好まれるようにきつい靴を履いたと言う。しかし, 当時の小足は「天然織足」で, 足の施術—纏足は施していないが, 二千年前から, 中国人の心の中に黙々と, 小足は美人の条件の一つとなっていた。二千年経った今になっても, その思想には変わりないと推察される。

この説は直接纏足の起源説とは言えないが, 歴史上, 一つの側面として多くの物が映し出される, それは帝王の威厳と生活の贅沢さ, 男尊女卑の世界, 男性の遊び心, 女性自身の弱さなどである。又, いつの時代でも, 世間で女性の足に対する厳しさが減ることもなく, むしろ, 年々厳しくなるのが分る。こんな環境の中に, 女性の心が益々歪んで行くのは当たり前的事であろう。

5) 晋説 (西暦265~420年)^{2), 3)}

この説の代表的な人物は清朝末の胡震亨 (コシンコウ) である。胡震亨は『唐音癸織』の中, 「従来婦人弓履之性『晋書・五行志』附見両言云: 「男子履方頭, 女子履圓頭。」……圓頭之式, 適于足小之用。……詳繹時風, 纏足自寓, 亦何必明白言之……」と書いている, 胡震亨の考え方では, 婦人の纏足の風習は遅くても晋から始まる, 理由としては, その時代の婦人は既に「圓頭」の靴を履くことになっていたからである。私は胡震亨の理論に対して少し強引的な面があると思う。

6) 六朝説 (西暦498~500年)^{1), 3)}

南齊東昏侯は宮女に金箔で蓮花を作らせ, 床に貼り, 藩貴妃にその上を歩かせた。藩貴妃の歩く姿は大変に色っぽくて, 至る所にまるで本当の蓮花が生々しく咲いているようで, 人々を魅了させたと『南齊・東昏侯記』に記載されている。これは, 後, 度々古代小説の中に女性の歩く姿を, 「歩歩生蓮花」と描写するようになった事のきっかけである。後, 人々は纏足した足を「金蓮」と称した。続いて纏足靴も「金蓮」と呼ばれるようになった。又, 六朝楽府は「新羅繡行躡, 足趺如春研, 他人不言好, 独我知可伶。」と言う曲がある。唐の詩人—韓偓の『展子詩』には「六寸膚圓光致致, 白羅繡履紅托裏, 南朝天子欠風流, 却重金蓮輕綠齒。」とある。六寸の膚とは素足の事であるが, 台には刺繡した白羅を貼り, 台の裏は紅, 齒を緑色に塗った下駄があった事を示している。

ここで, 六朝の人々は女性の足をどのくらい重視したかが分る, かと言っても, 纏足は六朝からと断言はできない。第一, 藩貴妃は纏足をしているのかどうか記載されてない。又, 六朝楽府の曲はただ可愛い足を描写しているだけである。続いて, 韓偓の『展子詩』は足の寸法は六寸とはっきり書かれている。詩の中の「金蓮」は普通の足を指しているのは分る。しかし, この時代の「金蓮」への重視と後の「三寸金蓮」への崇拝は歴史と共に, 何とか見えない糸 (女性の足に対する重視さ, 女性を束縛したい気持ち等) で結ばれていると思われる。

7) 隋 (ズイ) 朝場 (ヨウ) 帝説 (西暦605~618年)¹⁾

隋朝場帝は荒淫な皇帝である。

ある日突然, 彼は船で運河の上を変った遊び方をしたいと言い張った, その変わった遊び方と言うのは, 船員を使わずに, 100名の美女を選出して船員の代わりに, 彼女たちを運河の両岸に行かせ, 無理やりに縄で船を引張り出すという仕事をやらされた。

この中に, 呉月娘と言う鉄匠の娘がいた, 皇

帝のやり方は、彼女の反発性を誘発させ、彼女は特別に長さ3寸、幅1寸の蓮花形の刀を父に作らせた。出来た刀は精緻で鋭く、彼女は長い布を用いて、この刀を足の裏に固定し、又、その足の寸法で一足の靴を作った、この一足の靴の底に蓮花も刻んである。歩く時、床に蓮花を印され、非常に綺麗である。煬帝はこれを見て嬉しくなった、また呉月娘の綺麗な顔を見て、思わず彼女の纏足した足を近くに見たくなった、そして、彼女を身近に呼んだ。煬帝の侍臣らが去った後、呉月娘はゆっくりと纏足の布を解きながら、蓮花の刀で煬帝に刺した、煬帝は手の腕に受傷し、同時に剣を呉月娘に出した、呉月娘は失敗を知り、その場で川に身を投げ、自殺した。煬帝は宮廷に戻った後、すぐ「女子再美、裏足者不選」と言う聖旨を出した。でも、民間の女子は呉月娘を記念する為、纏足を始めた。

この伝説は、中国の運河流域によく伝わり広がった。中国では中秋明月の時、月餅を食べるのは明代の英雄—戚継光（セキケイコウ）（西暦1528～1587年）を記念するため、農曆五月五日はちまきを作るのは戦国の愛国詩人—屈原（クツゲン）（西暦前339～西暦前278年）を記念するためである、皆、民間伝統風習である。呉月娘を記念する為、纏足を始めたと言うのもありえる話である。

8) 唐説（西暦712～756年）^{1), 3)}

李淵（エン）が隋を滅ぼして、帝位につき、梁（リョウ）に滅ぼされるまで約三百年続いた。この間、国の政治は安定し、経済の発展は速く文化も最盛期に至った。[李白、杜甫（トホ）、白居易（ハクラクテン）、韓愈（カンユ）等詩人もこの時代の生まれ] 人々の思想は朗らかで、常に、新しいものを追求し、服飾も外域のものを融和して、特色のある唐服が生まれた。唐の服は実用的で、禁律も少なく、服飾の解放期であると、歴史上、高く評価された。

但し、開元（カイゲン）（西暦713～742年）から天宝（テンポウ）（西暦742～756年）までの間、唐玄宗（トウゲンシュウ）は段々政事と

離れ、宮廷の歌舞に陶醉した。天宝3年、唐玄宗は楊玉環（ヨウギョクカン）を貴妃にした。楊貴妃を非常に愛し、「……、芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起、从此君王不早朝、承歡侍宴無閑暇、春从春游夜專夜、后宮佳麗三千人、三千寵愛在一身……」、白楽天の『長恨歌』の中に書かれるように、荒淫の生活を送った。西暦752年楊貴妃の兄である楊国忠（ヨウコクチュウ）を宰相（サイショウ）（天子を補佐して、政治をとる最高官）に起用した。それ以後、「任人唯賢」の政策が徹底的に変わった。毎日、帝王、宮廷内外、役人らは酒と女に溺れ腐敗の生活を送ったため、社会矛盾を激化し、国家の風俗も奇形なまでに走った、世の中の女子の履物、着る物は秦、漢（シンカン）の広い袖に戻り、楊貴妃は刺繍の尖る靴を履く先導者になった。これは、女性にとって大きな打撃で、歴史上では大きな後退である。後人の話によると、楊貴妃の生前と死後は皆弓形の纏足靴を履いた。清朝の伊世珍は『琅環記』の中に「楊貴妃在馬嵬坡被唐明皇賜死時、有個女子拾得他一双雀頭鞋、薄檀木底、鞋長僅3.5寸」と書かれている。『羣談采録』にも「仙子凌波去不還、獨留塵襪馬嵬山、可憐一掬無三寸、踏尽中原万里翻」と記載されている。唐代詩人杜牧（西暦803～852年）の詩の中に「細尺裁量減四分、織織玉丈筍裏輕雲」（唐尺の1尺は蕪尺で割ると4寸8分になる、今の尺で直すと4寸3分になる）とある。白楽天の詩の中でも、「小頭鞋履窄衣裳」と書かれている。又、『唐書』の中に、「今鞞鞋為不纏足者所穿、纏足者以絲為鞋。」と記載され、この記載では唐代の纏足靴は絹で作られるのを表明した。その他、西安郊外の中堡村と言う所、唐代の1号、2号の墓を発掘された時、女俑は皆尖る靴を履いたと言う。でも、もっと多い資料では唐代の女性は纏足していないと言う。

唐代には纏足を既にしているかどうか、謎である。否定する人は多いようである。否定説を主張する人は、むしろ、個別場所で発掘した唐代の女性の身に付けた品を強調して、否定した

と思う。もし、唐代には纏足をしていないとすれば、何故、多く唐代詩人の詩の中に存在しない纏足を書かれたりするのかが疑問を抱く。でも、纏足をしたと言う実証がない上、肯定する事もできない。

中国は周知の通り、土地が広くて、当時の交通は今のようには発達していないから、纏足が唐代から始まって、ある所の一部の女性に限られていたと思う、発掘した物も限りある場所で、一部の女性の物と考えられる。その偶然と偶然の間に必然になる理由が見出せないでしょうか。

9) 五代南唐(ナントウ)説(西暦937~975年)^{1), 3)}

中国では、「三寸金蓮」は五代南唐に始まるというのが圧倒的な意見である。

唐代前の各代の仕女は、「雲頭」、「如意」など足先が上に反っているデザインの履物を履くが、五代の李後主(リコウシュ)は官娘に纏足させて踊らせたから、仕女の間から纏足を始め、刺繍の尖る靴も履き始めたと考えられる。

南唐の最後の皇帝-李煜の宮女に、官娘と言う、華奢で、踊りの上手な女子がいた。そこで、李後主は、6尺ぐらい高さの金製の蓮花台を作らせて、官娘の足を布で縛って細く小さくし、



図1 官娘、脚を縛る

指先を曲げて新月状にさせ、蓮花の中を舞いながら歩かせた所、その彷徨うさまは「凌波仙子」のようであったと言う。纏足も「金蓮」と呼ばれるようになった。後、宮内外の女子はそれを模倣し始めた。纏足が美であり、貴であり、嬌であり、雅でありと言う認識があった。詩人-唐鏞(トウコウ)は官娘の為に「蓮中花更好, 雲里月長新」と言う詩を作った。(図1参照)

以上種々纏足の起源説から、纏足の起源説の最大分岐点は起源時間である、最大類似点は起源環境-宮廷である事を教えてくれた。「三寸金蓮」起源当時、民間では纏足のことが珍しく見えた、時間の流れにつれて、一つの民俗として、人々に受け取るようになった。この中に、男性は重要な役割を果たしたと思う、男性がいなければ、纏足は花火のようにすぐ闇の中に消えてしまったかもしれない、又、纏足は民間まで広い範囲に伝わらなかったと断言できる。

又、前7種の起源説は根拠不足と言う点があるから、起源時期と見なされないかもしれないが、伝説として存在価値があると思う、少なくとも、纏足の「準備」期と言えるでしょう。最後の2種の起源説は信じる部分が多く、時間差は200年近くもあったが、歴史上、五代十国は唐朝後期の「藩鎮(ハンチン)割据」の継続である、2説は何か繋がりががあると思われる。故に、纏足の起源時期は遅くても五代南唐と推測される。

2. 纏足方法(図2, 3, 4参照)

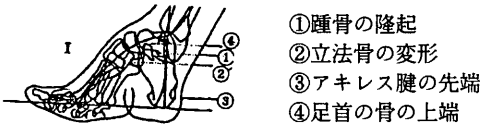
1) 纏足方法

通常4~8才の間に、母親或はその他の婦人によって、親指以外の指を足の底に折り、幅約10cm、長さ約3mの布(纏足した老婦人の話によると、纏足する布は幅が7~10cmの長さ3mぐらいの一本物と70cmぐらいの長さで4~5本の物と二種類がある)をもって、両足がしっかり縛られ、小さい靴の中に固定されるが、それによって、足の成長を阻止され、足は親指に向



図2 纏足によって著しく
変形したX線透視図（靴を履いた時）

1) 纏足者



2) 通常者

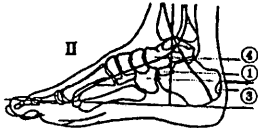


図3 纏足者と通常者の比較

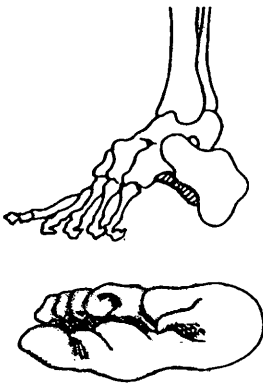


図4 変形した足骨と足裏

かって尖った竹の子のような形になる，まるでハイヒールの靴をはいて，つまさき立ちになったと同様の姿勢をとる。さらに，足の形を定型してから，足の裏に円棒を置き，足に力を入れることによって，足の裏側も弓形にさせると言う人もいる。弓形底纏足はもっともモダンな纏足と認められた，但し，この方法を利用したのは一部の人のみである。

2) 纏足する年齢

纏足の興盛につれて，専門業とする纏足婦人が現れた。纏足の経験を積み重ねることによって，年齢が大きいほど，苦痛も多く受けることが分かった。故に，民間では4～8才から始まるが，あまり遊ばせないお嬢様には2～3才からも始まった。でも，纏足した人の中に，成人になってから纏足する人もいた。

3) 纏足する日

纏足する日は地方によって違うが，華北，山西省などでは，農8月24日の「小脚姑娘」の誕生日として，お祭りを行った上で開始される。山東省では農曆の12月8日「臘八」に行う，「臘八」の日はもっとも寒い日で，身体感覚が麻痺しているから痛みを感じない日として，5～8才の女の子に耳の穴にピアスをあけたり，纏足のために布で足を包み始める日としていた。

4) 纏足の苦痛³⁾

纏足の苦痛は想像以上であった。纏足としての形を整うまでには，甕一杯の涙を流したというのも過言ではない。清朝の李汝珍（リジョチン）の小説『鏡花縁』の中に詳しく描写している。

李汝珍は『鏡花縁』を書く時，わざと，男女顛倒の女権の世界を作り出した。故に，小説中の宮娥，王妃など，みんな女王中心である。林之洋（リンツシヨウ）は女王に使えた一人であり，纏足をした記録が次のように小説に書かれている。

「……黒い髭の宮娥は低い椅子に座り，先ず林之洋の右足を宮娥の膝に置き，明簪（メイハン）を指と指の間にふりかけてから，しっかり



図5 清朝 纏足ブーツ
10種類の色違い絹を使った
南京博物館に保存

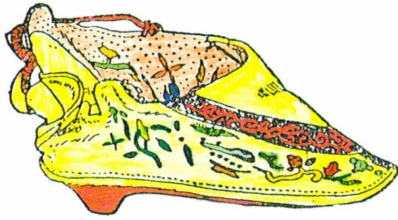


図6 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

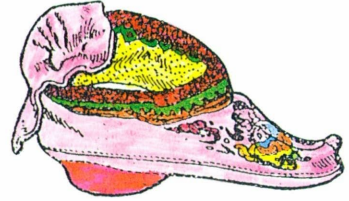


図7 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

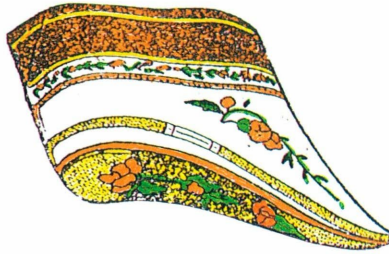


図9 清朝 山東地方の纏足靴
青島博物館に保存



図10 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

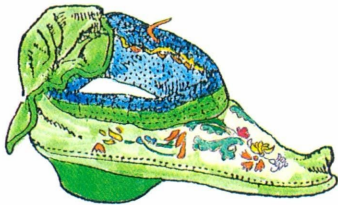


図8 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

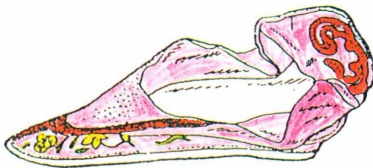


図11 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

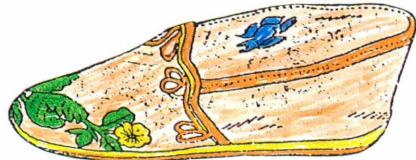


図12 サラ族女性の纏足靴
(1940年～今まで)



図13 土族女性の纏足靴

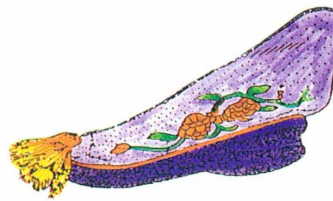


図14 清朝 纏足靴
中国古鞋博物館に保存

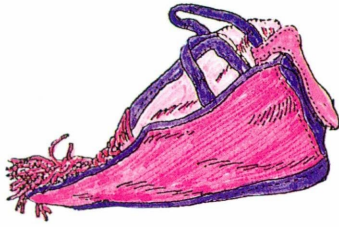


図15 清朝 老婦人用纏足靴
安徽省古鞋博物館に保存



図16 清朝 夏用纏足靴
安徽省博物館に保存



図17 清朝 夏用纏足靴
中国古鞋博物館に保存



図18, 19 サラ族女性の冬用纏足靴（綿入り）

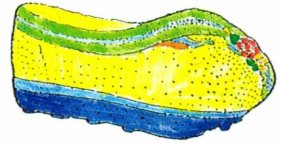
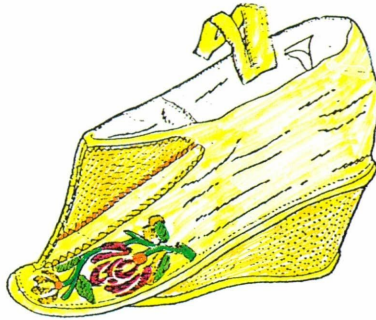


図20 雨「金蓮」



図21 纏足靴のカバー



写真1 清代の纏足婦女の尖頭弓鞋
（伝世品）

くっつけて、足裏に折り曲げ、白綾で巻き始める。二周巻くたびに、別の宮娥が用意した針と糸でこまかに縫いつけて、布がゆるんだりすることのないようにする。林之洋の身体は四人の宮娥に、足も二人の宮娥に押さえられ、終始動けない状態だった。包み終わると、宮娥たちの力をあわせて、すぐ赤い色の軟底纏足靴をその場で作り上げ、林之洋に履かせた。纏足後の足は炭火の上で焼くような感じで、痛みが体中にはしる、林之洋は思わず大泣きした……

「……毎日、林之洋の両足は宮娥たちによって葉の糞に漬けられたり、巻き直したり、半月も満たない内、足の形は湾曲になったが、十本の指も臭くなって、日々鮮血淋漓……」

「知らない内に足の上の血肉が化膿して、膿水も流れ尽き、枯れた骨だけを残し、両足は瘦小に感じた……」

5) 纏足の結果

纏足する期間は個人差があるが、完成するまで約三年の月日を要する。手術にさいしては腫れ、炎症、化膿、出血と共に痛みに襲われ、まさに殺生されているようである。その後の変化としては、あらゆる足骨毎に中足骨、趾骨が細く小さくなり、下腿の骨も繊細になる。又、体の成長に連れて、直立歩行の不安定さを招く。その為、両足は常に「八」の字の姿勢をとり、これに伴って腰の上は前突し、腰椎の前方への湾曲が強まる。

外出や労働が不便なために女性の家庭内幽閉を一層助長した。女性美、官能美の一条件として男性の猟奇的な嗜好、玩弄の対象であった。女性の一生は生まれるたびに、苦痛と不自由を強いられる一方、まさに、女性が隷属的な地位にあった、中国封建社会の象徴的な産物と言えよう。

3. 纏足の分類 (図5～23, 写真1参照)

a) 纏足靴のデザインから分類すると、高統「金蓮」(纏足ブーツ)(図5参照)、低幫(普通

の纏足靴)「金蓮」(図6～17参照)、翹頭「金蓮」(図23参照)、平頭「金蓮」がある。

b) 季節から分類すると、冬に綿「金蓮」(図18, 19参照)、春、夏、秋に挾布「金蓮」の中に、甲部分の硬い硬靴面「金蓮」と軟らかい軟靴面「金蓮」がある。

c) 靴の模様から分類すると、刺繍入り「金蓮」と素色(黒、紺等地味な色を指す)「金蓮」がある。

d) 気候から分類すると、晴天と雨「金蓮」(図20参照)がある。

e) 靴の底から分類すると、平底「金蓮」、弓形「金蓮」(写真1参照)、ハイヒール「金蓮」(図22参照)がある。

f) 靴の素材から分類すると、皮(図22参照)、布、絹、麻「金蓮」がある¹⁾。

1) 「金蓮」の製作¹⁾

一般的には、「金蓮」靴の底は色布で1～2cmの厚さの木を覆う方法と又は、白い布を1～2cmぐらい重ねてから、太い糸で縫い合わせる方法がある。靴の底は平底と単純なハイヒールの他に弓形の物もある。「三寸鞋、底穹七分」の簡単な方法によって靴の長さを小さく見せる。靴の上の部分の材料は絹の紗や綾織のほかに、麻や木綿も使われる。作り方は、靴の上部分を裁断後、紙に写した模様をその上に貼り、紙上の模様に沿って刺繍するか、先に布の上に模様を写し、刺繍してから裁断する二通りの方法がある。北方地方は一般的に裁断してから刺繍するが、南方地方では後者の方法である。又、靴の形が崩れ難く、長持ちするために、裏と表地の間に芯を入れた。靴の底と甲の部分の縫い合わせは、一般的にマッケイ式(表から縫い目を見せない方法)を採用するが、中にごく一部の人はグッドイヤウエルト式(表から縫い目を見せる方法)を使う。昔、「金蓮」靴の製作は、殆ど女性の手によって作られたものである、統一の靴の木型はない。靴の形を整えるのは布切れと綿である、女性たちは布切れと綿を靴の中に力一杯詰込む作業をやらなければならなかつ

た。

纏足の女性は冬、綿入れの綿「金蓮」もしくはアンクルブーツ「金蓮」を履く。作り方は挟布「金蓮」と同じく、只、靴の表と裏地の間に綿を入れるだけであった。挟布「金蓮」は硬幫と軟幫がある、硬幫「金蓮」と軟幫「金蓮」の区別は靴の表と裏地の間に厚い芯を入れるのと厚い布を入れるのとの違いである。厚い芯の作り方は、布切れを板の上に糊で何層も粘着して乾くまで日に照らす。硬幫「金蓮」の特徴は、靴の形は容易に崩れない、しかし、足に馴染み難いため、普段は履かない。軟幫「金蓮」の特徴は足に馴染み易い、従って、普段、人々は殆ど軟幫「金蓮」を履いている。その他に夏専用の涼靴「金蓮」もある、デザイン上からみると以下三種がある。 a) 親指の所に2 cm程の穴を開ける。(図16参照) b) 靴の後ろ側のバックマティを開いて、紐で連結する。 c) 足の甲の所に開いて、紐で繋ぐ。(図19参照) しかし、昔から中国の女性は保守的な考え方があって、やはり涼靴「金蓮」を履く人は少ない。

2) 高統「金蓮」、低幫「金蓮」と翹頭「金蓮」について

高統「金蓮」(図5参照)はお洒落なイメージがある為、製作する時、大変力を入れる。その為、高統「金蓮」の大部分は貴族の女子に着用された。資料によると、ある高統「金蓮」は八種類の絹を使った、一つの素材に異なる図案を刺繍し、刺繍の手法は繊細さを誇る蘇繡で行う。靴飾の艶やかな色と精緻さは人々に感嘆させると言う。こういう靴を一足作るのに、女性一人で半年以上かかったと言う事である。このような手間暇がかかる高統「金蓮」とは、清朝女性寛口ズボンと纏足靴を結合した産物である。

低幫「金蓮」のデザインは比較的が多い、しかも、よく見掛ける、平民の女性は普段自分で製作して、着用する。

宋朝、元朝と明朝は翹頭「金蓮」(図23参照)が多数である、これは歴史上、自然の流れである、清朝から今日まで、一般的に平頭「金蓮」

が多く見られるが、只、西北と西南地方の漢民族と少数民族の女性だけ、交通の不便と文化の遅れにより新しい情報が届かないため、依然として古代の翹頭「金蓮」を履いた。

3) 「金蓮」と刺繍¹⁾

中国の「金蓮」は刺繍入りが一般的であるが、刺繍方法も色々である。江蘇省と浙江省地域は蘇繡が多く見られる。蘇繡用材料は絹と絹糸である、図案の造形は中国の工筆画の影響を受け、きめ細かい針目と鮮やかな配色の配合で、繊細さと豪華さが感じられる。そのような訳で、蘇繡の作品は鑑賞品にもなったりしている。西北西南地方は湘繡のほうが多く採用している。湘繡用材料は藍染めの綿布と綿糸である、特徴は蘇繡と違って、針目も荒々しく、素朴な感じがする。

又、「金蓮」靴の底に刺繍を入れる人もいた、但し、こういう靴を履くのは殆ど貴族の女性である、彼女たちは働く必要がなければ、床で歩く事も少ないためである。刺繍「金蓮」に対して素色「金蓮」もある、素色「金蓮」は平民の老人、或いは、喪期中の女性が着用する物で、表には刺繍を絶対入れない、色も黒、紺、白だけで、文化大革命後、纏足した女性は殆ど黒色の靴を履くようになった。(図15参照)

4) 纏足靴のヒールについて

古墳から出た遺物から見ると、明朝以前の「金蓮」は一般的に踵のない物が多く、清朝後、特に清朝の半ば、末期から、西洋文化の影響で踵のある「金蓮」が出てきた。しかも、2 cm以上の物が殆どである、当時の踵の作り方、西洋人のハイヒールの作り方と全く同じである、木で形を確定、靴と同じ布で包むと言う方法。纏足その事から見るとヒールの出現は一つの進歩である、適当に高い踵は纏足する女性の重心が後ろに傾く姿勢を和らげた、健康上の助けともなった。但し、無理して、踵の高さは6~8 cmぐらいにする人もいた。清朝の末、民国の初め頃の物と認定された、纏足靴のカバーの踵の高さは何と8 cmもあった。8 cmの踵の「金蓮」靴

を履いて、歩けたかは、疑問を抱く。「金蓮」そのものが奇形であるが、ハイヒール「金蓮」は奇形の中の奇形と思う。しかし、こういう奇形な「金蓮」が生まれる時代こそ封建靴飾と現代靴飾の交差点とも言えよう。

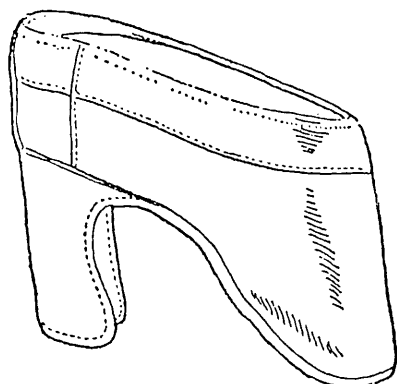


図22 清朝 ハイヒール「金蓮」
ドイツ古靴博物館に保存

5) 雨「金蓮」

纏足する女性は雨の時履く「金蓮」もあった。四つの様式がある。

a) 皮「金蓮」一靴全体を桐油で塗る、桐油は防水作用があると言われる。

b) 「金蓮」のカバー皮でできた、「金蓮」の上に履く、皮は水に浸透し難いからである。

c) 鉄釘「金蓮」一靴の底に厚さ0.5cmの鉄板を使い、釘で固定する。湿地から水が靴の底から滲み難いためである。

d) 1920年代から、雨の時履くゴム靴（図20参照）の誕生につれて、纏足用のゴム靴も生産されるようになった。

通常、雨「金蓮」は一般の家の女性、あるいは、女官が着用するが、貴族の女性は殆ど履かない、履くとしても、「金蓮」のカバーだけであった。（図21参照）

6) 結婚時の「金蓮」について¹⁾

結婚時の「金蓮」の着用は、非常に厳しい規則がある。新婦は三足の「金蓮」を備えるべきである。一足目は、靴の底は白く、甲は紫色に

することである。この一足の靴はかごを乗る前に履く物で、「白」「紫」は中国語の発音では「百子」と同じく、結婚後、子供が多く恵まれるように、願いを込めている。二足目は、一足目の上に履く物である、作り方は黄色の正方形の綿布、或いは絹を一足目の寸法に合わせて、畳むようにできた物である、但し、純粋な黄色は皇帝と皇室の方々の色で、使ってはいけない。黄は皇で、最高の意味である、封建時代、冠、婚、葬、祭等お祝いをする時、皆「黄道吉日」（陰陽道で、ものごとを行うのに一番良いと言う日）を選ぶ。三足目は色鮮やかな刺繍入りの軟底「金蓮」である。俗に「睡金蓮」と言う。結婚式後着用する物で、但し、ベットに入る時、「睡金蓮」は新郎の手から脱がされる、この「睡金蓮」の中に絵が書かれている、絵の内容は新婦初夜の夫妻生活と関わりがあるから、新郎新婦は一緒に見るべきである。

7) 独特な「金蓮」

清朝の時、一種独特な「金蓮」も出現した。製造者は木底の上に一輪の蓮を彫り、木底の側面には精緻な引き出しを作り、引き出しの底の部分は網ででき、引き出しの中に香粉を盛り、女性はこの「金蓮」を履いて、歩く時、香粉が靴から自然に漏れて、床に香のある蓮をできる。まさに「歩歩生蓮花」であろう。

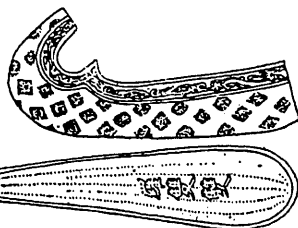


図23 浙江省に発掘された
銀製の纏足靴 長さ14cm 幅4.5

中国の安徽（アンフエイ）省内で、隋朝（西暦600年）の陶器の纏足靴が発掘された。その靴の長さはたった12cmである。浙江（セッコウ）省内でも、南宋（西暦1127～1279年）の銀製纏足も発掘された、靴の長さは14cmである、靴の底には「羅双双」と言う女性らしい名前も刻んである。（図23参照）「金蓮」靴を何故陶器と銀材で作ったのか、謎であるが、中国人の習慣によると、死者を埋葬する時、通常、死者の生前の常用品、好物を副葬品として、死者と一緒に埋葬する。陶器と銀材の「金蓮」靴がお墓から出てくることによって、古代の人は「金蓮」に対してどのくらい重視しているのか、分かるような気がする。

まとめ

纏足の起源説、纏足方法、纏足靴の分類などは、以上述べたように、纏足は皇門貴公子たちの悪趣味に応じて、生まれた奇習である、女性にとってはむしろ鎖である。「三寸金蓮」起源当時、民間では纏足のことを珍しく見えた、時間の流れにつれて、一つの民族として、女性たちに受け取るようになった。その背景は、やはり、貞操観念と男性の亭主関白意識であった。女性は纏足によって、行動力が落ち、主人への依頼性を増し、世間離れの生活を送らなければならぬ。政治上、経済上の地位も失った、同時に人格上の尊敬も得られなくなった。逆に、男性は征服者としての自覚を蘇え、女性の地位も男性の付属品から玩具へと一段下げた。その結果より厳しい「男尊女卑」の社会を作り出したことによって、男性も社会で、家庭での位置

は確保されるようになり、自由放浪の生活ができるようになった。この影響は、21世紀に真間近いした現在も、人々の生活を左右しているように思われる。

引用文献

- 1) 駱 栄麒 『中国鞋文化史』
上海科技出版社 上海 (1990)
- 2) 駱 新, 姚 莽 『衣冠滄桑』
農村読物出版社 上海 (1991)
- 3) 高 供興, 徐 錦鈞, 張 強
『婦女風俗考』 上海文芸出版社 上海
- 4) 袁 杰英 『中国歴代服飾史』
高等教育出版社 上海
- 5) 張 国栄 『唐詩三百首訳解』
中国文聯出版公司 北京 (1987)
- 6) 賈 逸君 『中華婦女纏足考』 (1925)
- 7) 周 高 春明
『中国五千年 女性装飾史』
上海学林出版社 三聯書店 (香港)
有限公司 (1993)
- 8) 岡本 隆三 『纏足物語』
東方書店 (1986)
- 9) 川端 厚子 『中国における漢民族女性の
纏足に関する研究』
大阪信愛女学院短期大学紀要
第22輯 (1988)

謝 辞

平成7年4月から9年3月までの二年間、中里喜子教授のご指導を受けたことを感謝いたします。